

# サーンバ伝説の和訳および解説 (1)

## — 『サーンバ・プラーナ』 第3章および第6章 —

永井 悠斗

本稿は、サンスクリット語で書かれた宗教文献『サーンバ・プラーナ (*Sāmba-Purāṇa* : 以下 SP)』において語られるサーンバ伝説の和訳および解説である。以下では、まずサーンバ伝説の和訳をテキストに続く形で掲げ、次いでサーンバ伝説とこれを伝える SP について簡単に概要を示す。

なお、本稿では「サーンバ伝説」という呼称を、訳出の底本とした Stietencron (1966) において *Die Sāmba-Legende* として抜粋され、伝説の本筋として扱われている SP の第3章、第6章、第24章そして第26章を指すものとして用いている。ただし、この内 SP 6, 13-22 は、上掲書において伝説の本筋ではないものとされている。本稿もこれに倣い、当該詩節のテキストおよび和訳を省略した。

また、紙幅の関係から本稿での訳出範囲は、第3章 (SP 3, 1-56) と第6章 (SP 6, 1-12; 23) までとなっており、第24章 (SP 24, 1-39) および第26章 (SP 26, 1-51) は含まれていない。サーンバ伝説のこの残り後半部については別稿を期したい。

### 1. テキストおよび和訳

#### 凡例

- ・テキストは、Stietencron (1966) に所収のものを底本とし、これに加えて、適宜 Srivastava (2013) も参照した。両者が異なる読みを採用している場合は、訳者の判断で適切と思われた読みを本文中に記し、もう一方のテキストにおける読みは註において明記するよう努めた。また、和訳にあたっては、上掲の Stietencron (1966) に所収のドイツ語訳および Srivastava (2013) に所収の英語訳を参照した。
- ・各詩節の区切りを示す二重ダンドの使用と偈の番号付けに関しては、写本自体も含め SP のテキストに混乱が見られる。本稿では、この二重ダンドの位置と偈番号について、主として便宜上の理由から、底本とした Stietencron (1966) ではなく Srivastava (2013) に従っている。ただし、両者の偈番号が異なるのは、本稿の訳出範囲では SP 3, 46 以下に限られる。また、テキストは、区切りが良いと思われた箇所、訳者の判断で適宜区切った。
- ・訳文中の [ ] 内は訳者による補いの部分であり、( ) 内は直前の語の言い換えである。
- ・訳文や註において用いた略号は以下の通り。

MBh

*Mahābhārata*

SP	<i>Sāmba-Purāṇa</i>
Srivastava	Srivastava, V. C., ed. and trans. 2013. <i>Sāmba-Purāṇa: An Exhaustive Introduction, Sanskrit Text, English Translation, Notes &amp; Index of Verses</i> . Delhi: Parimal Publications.
Stietencron	Stietencron, von Heinrich. 1966. <i>Indische Sonnenpriester: Sāmba und die Śākadvīpīya-Brāhmaṇa: Eine textkritische und religionsgeschichtliche Studie zum indischen Sonnenkult</i> . Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

## テキストおよび和訳

### SP 3, 1-56

bṛhadbala uvāca

ādyam sthānam raveḥ kutra jambūdvīpe<sup>1</sup> mahāmune |

yatra pūjām vidhānoktām pratigrhṇāty asau svayam || 1 ||

ブリハッドバラ王は言った<sup>2</sup>。「偉大なるムニよ！ かのお方 [太陽神] ご自身が、そこにおいて儀軌によって説かれた供養<sup>3</sup>を受けるといふ、太陽神 (ラヴィ) の本来の座所といふのは、ジャンブードゥヴィーパのどこにあるのか？」

vasiṣṭha uvāca

candrabhāgātate ramye puram yat sāmباسamjñitam |

bhūrloke śāsvatam sthānam tatra sūryasya nityadā<sup>4</sup> || 2 ||

prītyā sāmباسya tatrārko jagato 'nugrahāya ca |

sthitō dvādaśabhāgena mitro maitreṇa cakṣuṣā || 3 ||

tatra bhaktimataḥ sarvān anugrṇāti bhāskarāḥ |

vidhiprayuktām pūjām ca grhṇāti bhagavān svayam || 4 ||

ヴァスィシュタ仙は言った。「チャンドラバーガー河<sup>5</sup>の美しき岸边に、サーンバにちなんで名づけられた都がある。地上世界における太陽神 (スーリヤ) の永遠の座所は、常にそこにある。そこには、サーンバへの好意の故に、そして世界に恩恵を施すために太陽神 (アルカ) がおり、十二の部分に伴い<sup>6</sup>、友愛に満ちた眼差しを伴って太陽神 (ミトラ) が座している。そこでは、太陽神 (バースカラ) が [太陽神へ] 信愛を抱く者たち全員を受け入れ、ご自身は、儀軌に則って行われた供養を享受している」

<sup>1</sup> Srivastava: kasmin dvīpe

<sup>2</sup> この章までにおいて、いかなる神を最高神として礼拝すべきかと問うブリハッドバラ王に対して、ヴァスィシュタ仙は太陽神こそがそれに相応しいと述べ、その礼拝の特徴、功德そして太陽神の座する場所などについて語る。第3章は、それに対する王のヴァスィシュタ仙への問いから始まる。

<sup>3</sup> ここで供養と訳したプージャー (pūjā) は、神像に対する礼拝儀礼を特に指す。プージャーでは神像が水をかけて清められ、花や香などの供物が捧げられる。

<sup>4</sup> Srivastava: nityatā

<sup>5</sup> 今日のシェナブ河 (Chenab) のこと。いわゆる五大河 (パンジャーブ) の一つに数えられ、その河流はヒマラヤ山脈より発しカシミールおよびパンジャーブ地方を通してインダス河に合流する。

<sup>6</sup> 原語 dvādaśabhāgena : 十二の部分とは、一年の十二か月、あるいは全部で十二柱いるとされるアーディティヤ神群のことを意味すると思われる。

bṛhadbala uvāca

ko 'yaṃ sām̐baḥ sutaḥ kasya yasya nāmnā raveḥ puram<sup>7</sup> |

yasya cāyaṃ sahasrām̐śur varadaḥ puṇyakarmanāḥ || 5 ||

ブリハッドバラ王は言った。「このサーンバとは何者か？ 誰の息子か？ 太陽神（ラヴィ）の都がその名前にちなんでおり、またこの太陽神（サハスラーンシュ）が、正義をなすその彼にとっての、恩恵の施し手であるという彼は何者なのか？」

vasiṣṭha uvāca

aditer dvādaśaḥ putro viṣṇur yas sa punas tv iha |

vāsudevatvam āpannas tasya sām̐bo 'bhavat sutaḥ || 6 ||

sa tu pitrā bhṛśam̐ śaptaḥ kuṣṭharogam avāptavān |

tenāyaṃ sthāpitaḥ sūryaḥ svanāmnā ca puram̐ kṛtam̐<sup>8</sup> || 7 ||

ヴァスィシュタ仙は言った。「アディティ女神の十二番目の息子であるヴィシュヌ神<sup>9</sup>は、さらにこの世においてはヴァスデーヴァの息子（ヴァースデーヴァ＝クリシュナ）となったが、その彼の息子がサーンバであった。しかし、彼 [サーンバ] は父親によって激しく呪われ、重い皮膚病を患った。彼によって、この太陽神（スーリヤ）が安置され、自身の名前にちなんで都が作られた」

bṛhadbala uvāca

śaptaḥ kasmin nimitte<sup>10</sup> 'sau pitrā putraḥ svasambhavaḥ |

bhāvyaṃ hi kāraṇenātra yenāsau śaptavān sutam̐ || 8 ||

ブリハッドバラ王は言った。「いかなる理由で、自身から生まれたその息子を父親は呪ったのか？ というのも、彼が息子を呪ったのには、理由があるに違いないのだから」

vasiṣṭha uvāca

śṛṇuṣvāvahito rājams̐ tasya tacchāpakāraṇam̐ |

brahmaṇo mānasaḥ putro nārado<sup>11</sup> nāma yo muniḥ || 9 ||

brahmaloke munes tasya viṣṇuloke tathaiva ca |

sūryaloke ca satataṃ rudraloke tathaiva ca || 10 ||

pitṛrākṣasanāgānām̐ yamasya varuṇasya ca |

indrasya cāmarāvatyām̐ puryām̐ tu dhanadasya ca || 11 ||

<sup>7</sup> Srivastava: kutaḥ kasya putro nāmnā raveḥ priyaḥ

<sup>8</sup> Srivastava: puras kṛtam̐

<sup>9</sup> インド神話において女神アディティは、アーディティヤ神群の母として知られる。アーディティヤ神群に属する神格の数は、既にヴェーダ時代においても五から八の間で異なるが、プラーナ文献の時代には、しばしば十二とされた。この十二柱の神格として挙げられる名前にも異同が存在するが、通常、ダートリ、ミトラ、アリヤマン、インドラ、ヴァルナ、スーリヤ、バガ、ヴィヴァスヴァット、プーシャン、サヴィトリ、トヴァシュトリそしてヴィシュヌを指すことが多い。

<sup>10</sup> Srivastava: nimitto

<sup>11</sup> Stietencron: mānasaputro nārada

pr̥thivyaṃ pāṛthivās te ca ye<sup>12</sup> pātālasamudbhavāḥ |

sadā veśmasu teṣāṃ ca tasyāpratihatā gatiḥ || 12 ||

vāsudevaṃ sa vai draṣṭuṃ nityaṃ<sup>13</sup> dvāravatīm purīm |

āyāti<sup>14</sup> ṛṣibhiḥ sārddhaṃ krodhano munisattamaḥ || 13 ||

ヴァースィシュタ仙は言った。「王よ！彼のその呪いの理由を傾聴なさいませ。ブラフマー神の意から生まれた息子で、ナーラダという名前のムニがいる。このムニの歩みは、ブラフマー神の世界においても、さらにヴィシュヌ神の世界においても、また太陽神（スーリヤ）の世界においても常に「妨げられず」、さらにルドラ神の世界においても、祖霊（ピトリ）やラクシャサやナーガたちの世界においても、ヤマ神やヴァルナ神の世界においても、インドラ神の都アマラーヴァティーにおいても、ダナダ神（クベーラ神）の都城においても、また地上の王たちや地底世界（パーターラ）で生まれた者たちの諸々の宮殿においても、常に妨げられることがない。この気性の激しく、最も徳高いムニはヴァースデーヴァ（クリシュナ）に会うために、いつもドヴァーラヴァティーの都<sup>15</sup>ヘリシ達と一緒にやって来るのである」

athātrāgacchatas tasya sarve yadukumārakāḥ |

pradyumnapramukhā ye te prahveṇāvanatāḥ<sup>16</sup> sthitāḥ || 14 ||

abhivādyaṛghyapādyaiś ca pūjāṃ kurvanti yatnataḥ |

sāmbas tv avasāyambhāvitvāt tasya śāpasya mohitaḥ || 15 ||

avajñāṃ kurute nityaṃ nāradasya mahātmanaḥ |

rataḥ<sup>17</sup> krīdāsu satataṃ rūpayauvanagarvitaḥ || 16 ||

「そのような時、そこに到着した彼に、プラディユムナ<sup>18</sup>を筆頭とする、英雄ヤドゥの「末裔である」若者たち<sup>19</sup>は皆、へりくだってお辞儀したままでいる。そして、彼らは恭しく挨拶すると、歓待用の水<sup>20</sup>や洗足用の水<sup>21</sup>によって「ナーラダ仙に対して」努めて供養をなす。だが、サーンバは、その呪いが必然的であるが故に、惑乱しており、常に諸々の遊戯に耽って、自らの美しさと若々しさを誇り、偉大な魂を持つナーラダ仙をいつも軽んじていた」

<sup>12</sup> Srivastava: pāṛthivādyaḥ ye te

<sup>13</sup> Srivastava: nītvā

<sup>14</sup> Srivastava: āyāta

<sup>15</sup> ドヴァーラヴァティーはクリシュナの都の名前。MBhによれば、この都は、クリシュナらが属するヤーダヴァ族の滅亡の際に海中に没したとされる。

<sup>16</sup> Stietencron: prahvanā vinatāḥ

<sup>17</sup> Srivastava: tataḥ

<sup>18</sup> プラディユムナ (Pradyumna) は、クリシュナとルクミニの間に生まれた息子の一人。ジャーンバヴァティーの息子であるサーンバとは異母兄弟の関係にある。

<sup>19</sup> クリシュナやその子たちは、英雄ヤドゥを始祖とすることからヤーダヴァ族に属する。

<sup>20</sup> 原語 argya : プージャー等の儀礼において、祖霊や神像等の礼拝対象に捧げられる水のこと。閼伽水とも漢訳される。また、歓待のために客人に供される水のことも指す。

<sup>21</sup> 原語 pādya : 洗足用の水を特に意味する。

avinītaṃ sutam jñātvā cintayāmāsa<sup>22</sup> nāradaḥ |  
 asyāham avinītasya kariṣye vinayaṃ bhṛśam || 17 ||  
 evaṃ saṃcintayivā tu vāsudevaṃ tato 'bravīt |  
 imāḥ ṣoḍaśasāhasryaḥ<sup>23</sup> patnyo devasya yās tava |  
 sarvāsām ca manāmsy āsām sāmbera tvayi<sup>24</sup> keśava || 18 ||  
 hṛtāni puṇḍarīkāksa rūpayauvanaśālinā |  
 rūpeṇāpratimaḥ sāmbo loka 'smin sacarācare |  
 ato hīcchanti tās tasya darśanaṃ hy api<sup>25</sup> te striyaḥ || 19 ||

「この不遜な息子のことを知って、ナーラダ仙は、私がこの不遜な男に厳しく躰<sup>26</sup>をしてやろう、と考えた。このように意図してから、彼はヴァースデーヴァに語った。「ケーシンを殺す者、蓮の眼をした方よ、貴方の妻であるこれら一万六千人の女たち全員の心を、美しさと若々しさを有するサーンバが、貴方の許で奪っている。サーンバは、動くものと動かぬものを包摂するこの世界において、容姿の美しさの点で比類ない。それ故、貴方のその妻たちですら、彼とにまみえることを望んでいる」と」

vasiṣṭha uvāca

śrutvaitan nāradaḥ vākyam bhāvinārthena mohitaḥ |  
 avicāryaiva tat sarvaṃ devaḥ provāca nāradam || 20 ||  
 vāsudeva uvāca  
 na hy ahaṃ<sup>27</sup> śraddadhāmy evaṃ<sup>28</sup> yad etad vyāhṛtaṃ tvayā |  
 bruvāṇam evaṃ devaṃ tu nāradaḥ pratyuvāca ha || 21 ||  
 tathāhaṃ tat kariṣyāmi yathā śraddhāsyate bhavān || 22 ||

ヴァースイシュタ仙は言った。「ナーラダ仙からこの話を聞いた神は、運命づけられた目的のために、惑乱して、その全てに全く思い巡らすことなく、ナーラダ仙に言った。ヴァースデーヴァは言った。「貴方によって語られたそのようなことを、私は信じられない」と。このように語る神に対して、ナーラダ仙は答えて言った。「私はそれを、貴方が信じるようになしましょう」と」

vasiṣṭha uvāca

evaṃ ukṭvā yayau bhūyo nāradas tu yathāgataḥ |  
 tataḥ katipayāhobhir<sup>29</sup> dvārakām punar abhyagāt || 23 ||  
 tasminn ahaṃ devo 'pi saḥāntaḥpurikājanaiḥ |

<sup>22</sup> Srivastava: cintayāmāsaḥ

<sup>23</sup> Srivastava: ṣoḍaśasāhasrya

<sup>24</sup> Srivastava: kila

<sup>25</sup> Srivastava: tvāpi

<sup>26</sup> 原語 vinaya : 修養、訓練などを意味し、仏典では律と漢訳される (cf. 上村 1984 : 55 および 372)。ここでは、ナーラダ仙が礼儀をわきまえていないサーンバに対して行うものであるから、「躰」と訳した。

<sup>27</sup> Srivastava: na tv ahaṃ

<sup>28</sup> Stictencron: eva

<sup>29</sup> Srivastava: katipaye cāhni

anubhūya jalakrīḍāṃ pānam<sup>30</sup> āsevate rahaḥ || 24 ||

ヴァスィシュタ仙は言った。「このように言ってから、ナーラダ仙はやって来た時と同じように再び去って行った。それから数日を経て、彼は再びドヴァーラカーの都<sup>31</sup>へやって来た。その日、神 [クリシュナ] は後宮の女たちと一緒に人目を忍んで、水中での遊戯を楽しんだり、飲酒に耽ったりしていた」

ramye raivatakodyāne harmyamālopaśobhite |

sarvartukusumair nityaṃ vāsīte citrakānane || 25 ||

nṛtyadbhir barhibhir nityaṃ kekāśataninādite |

kokilārāvasaṃghuṣṭe cakravākopaśobhite || 26 ||

kokilāmadhurālāpajalakukkuṭanādite<sup>32</sup> |

ṣaṭpadodgītamadhure<sup>33</sup> śukacātakanādite || 27 ||

nānājalajapuṣpābhir dīrghikābhir alaṃkṛte |

haṃsasārasasaṃghuṣṭe cakravākopaśobhite<sup>34</sup> || 28 ||

tasmin sa ramate devaḥ strībhiḥ parivṛtas tadā |

hāranūpurakeyūraraśanādyair vibhūṣaṇaiḥ || 29 ||

bhūṣitānāṃ varastrīnāṃ cārvaṅgīnāṃ viśeṣataḥ |

krīḍārthaṃ padmapatṛeṣu niṣannānāṃ<sup>35</sup> yathārhatāḥ || 30 ||

etasmin<sup>36</sup> dīyate tāsāṃ iṣṭaṃ pānaṃ surāsavam |

maṇikāñcanapātreṣu nānāpuṣpādhivāsitam || 31 ||

「居並ぶ宮殿の花輪によって飾られた、美しいライヴェータカ山<sup>37</sup>の庭園の中の、常にあらゆる季節の花々が香っていて色鮮やかな森において、そしてまた、踊る孔雀たちの百重もの鳴き声が常に響き、コーキラ鳥の鳴き声が鳴り響き、チャクラヴァーカ鳥で彩られ、コーキラ鳥の心地よい歌声と水鴨<sup>38</sup> [の鳴き声] が鳴り響き、蜜蜂の羽音が心地良く、鸚鵡とチャータカ鳥 [の声] が鳴り響き、様々な蓮の花々が咲いた長形の池々によって飾られ、ハンサ鳥やツルたちの鳴き声が鳴り響き、チャクラヴァーカ鳥によって飾られたそうした森において、その時、その神は、首飾りや足飾りや腕飾りや腰帯などの装飾品を身に着けた妻たちに囲まれて楽しんでいた。遊戯のために蓮の葉々の上に、適切な仕方で並び座り、格別に美しい肢体を持つ着飾った高貴な妻たちに対して、ここでは、宝石や黄金の酒器の上で、様々な花々の匂いが香る望みの酒が供されていた」

<sup>30</sup> Srivastava: yānam

<sup>31</sup> クリシュナの都ドヴァーラヴァティーのこと。

<sup>32</sup> Srivastava: kokilāmadhurālāpe jalakukkuṭanādite

<sup>33</sup> Srivastava: ṣaṭpadodgītamadhure

<sup>34</sup> Srivastava: haṃsārāvasusaṃghuṣṭe sārasais samalaṃkṛte

<sup>35</sup> Srivastava: niyuktānāṃ

<sup>36</sup> Srivastava: tat tasmin

<sup>37</sup> ライヴェータカ山は、MBh 等で語られる神話的な山で、クリシュナの都ドヴァーラヴァティーの近くに位置したとされる。

<sup>38</sup> 原語 jalakukkuṭa : 「水中の雄鶏」の意で、水禽の一種、あるいはカモ類のことを指す。

etasminn antare buddhvā madyamattā iti striyaḥ || 32 ||<sup>39</sup>  
 uvāca nāradaḥ sām̄baṃ subodhya tvarayann<sup>40</sup> idam |  
 gaccha raivatakam sām̄ba mā tiṣṭhasva kumāraka || 33 ||  
 tvām samāhvayate<sup>41</sup> devo na yuktaṃ sthātum atra te |  
 tadvākyārtham abuddhvaiva bhāvinārthena coditaḥ || 34 ||  
 gatvā tu satvaram<sup>42</sup> sām̄baḥ praṇāmam akarot<sup>43</sup> pituḥ |  
 etasminn antare tatra yāḥ kāścit tulyasāttvikāḥ<sup>44</sup> || 35 ||  
 dr̥ṣṭvā tāḥ sahasā sām̄baṃ sarvās cukṣubhire striyaḥ |  
 na ca<sup>45</sup> dr̥ṣṭaḥ purā yābhiḥ puṣpaketusamo yuvā || 36 ||  
 madyadoṣāt tatas tāsām smṛtilopāt tathaiva ca |  
 yoṣitām alpasattvānām yonayas tu<sup>46</sup> prasusruvuḥ || 37 ||

「こうしている間に、その妻たちが酒に酔っていることを知って、ナーラダ仙はサーンバを上手く説き伏せ、急かしてこう言った。「サーンバよ、ライヴァタカ山へ行け。若者よ、ここに留まっていたはならない。お前のことを神 [クリシュナ] が呼んでいる。お前がここに留まっていることは理に合わない」と。その言葉の意図に全く気付くことなく、運命づけられた目的のために急き立てられて、サーンバは急いで [ライヴァタカ山の父のところ] 行って、父にお辞儀した。そうしている間に、そこにいた本性を同じくする妻たちは皆、サーンバを目にするや否や心揺さぶられた。愛の神プシュパケートゥにも等しい若者を彼女たちはいまだかつて見たことがなく、それ故、その徳少なき若い乙女たちの陰部は、彼女たちの酔いという過ちの故に、さらにまた記憶の喪失の故に、濡れそぼった」

śrūyate cāpy ayaṃ ślokaḥ purāṇe paṭhyate yathā |  
 brahmacarye 'pi vartantyāḥ sādhyā hy<sup>47</sup> api tathā śṛṇu || 38 ||  
 dr̥śyaṃ tu puruṣaṃ dr̥ṣṭvā yoniḥ praklidyate striyāḥ |  
 loke ca śrūyate hy<sup>48</sup> etan madyasyātyantasevanāt<sup>49</sup> || 39 ||  
 lajjāṃ muñcanti hr̥matyo nāryaḥ satkulajā api |  
 samāṃsair bhojanaiḥ snigdhaiḥ tathā madhusurāsavaḥ |  
 gandhair manoḥnair vastraiś ca kāmāḥ strīṣu vijmbhate || 40 ||

<sup>39</sup> SP 3, 32ab: vṛntaiś ca sahakārāṇām bhagnair nīlotpalair api : 底本とした Stietencron がこの ab 句をテキスト上の誤りとして本文から除いていることに倣い、本稿も本文中から ab 句を除く。

Srivastava では、削除は行われておらず、この ab 句は保持されている。

<sup>40</sup> Stietencron: subodhyaṃ varayann

<sup>41</sup> Srivastava: samāhūyate

<sup>42</sup> Srivastava: satvaṃ

<sup>43</sup> Srivastava: akarāt

<sup>44</sup> Srivastava: tulyasāttvikāḥ

<sup>45</sup> Stietencron: sa

<sup>46</sup> Srivastava: yonyaḥ śighraṃ

<sup>47</sup> Srivastava: tv

<sup>48</sup> Srivastava: tv

<sup>49</sup> Srivastava: madyasyātiprasevanāt

etadbuddhyā<sup>50</sup> kulastrīṇām śreyaḥ paramam icchatā |  
madyam na deyam alpam vā puruṣeṇa vipāścītā || 41 ||

「次のようなシュローカが聞かれる。プラーナにおいて朗読されているとおり、ブラフマチャリヤの時期にある女性について、聞き知れ。『見目麗しき男を見れば、女の陰部は濡れそぼる<sup>51</sup>』と。そしてまた、世間では、次のことが聞かれる。『度を越えて飲酒に耽溺するが故に、良家の生まれの慎み深い女たちでさえ恥らいを捨ててしまう<sup>52</sup>』。『油を使った肉の入った食べ物、それから甘美な酒や芳しい諸々の香物や衣服によって、女たちの間で情欲が起こる<sup>53</sup>』。これらの知識を持ち、良家の女たちに最上の幸せを望む賢き男は、[女たちに] 酒を与えてはならない、あるいは少量を [与えるべきである]

vasiṣṭha uvāca

nārado 'py atha taṃ sām̐baṃ preṣayitvā<sup>54</sup> tvarānviṭaḥ |  
ājagāmātha tatraiva sām̐basyānupadena tu || 42 ||

āyāntaṃ tam abhipreksya guruṃ devarṣisattamaṃ |  
sahasaivoththitāḥ sarvāḥ striyaḥ tā madavihvalāḥ || 43 ||

tāsām athoththitānām tu vāsudevas tv apaśyata |  
bhittvā vāsāmsi śuklāni patreṣu patitaṃ madam || 44 ||

taṃ dr̥ṣṭvā tu hariḥ kruddhas tāḥ śaśāpa tadā striyaḥ |  
yasmād gatāni<sup>55</sup> cetāmsi mām muktivānyatra vaḥ striyaḥ || 45 ||

tasmāt patikṛtāl lokān āyuso 'nte na yāsyatha |  
patilokāt paribhraṣṭāḥ svargam cāpi gate mayi |  
bhūtvā hy aśaraṇā yūyaṃ dasyuhastaṃ gamiṣyatha || 46 ||

ヴァスィシュタ仙は言った。「さてナーラダ仙もまた、そのサーンバを送り出した後、急いで後を追って行って、サーンバの後にそこにやって来た。やって来た最良の神仙であるその尊師を見て、かの妻たちは皆、酔いに悩まされながら、すぐさま立ち上がった。すると、立ち上がった彼女たちの白い衣服を突き抜けて、[彼女たちが座る] 葉々の上に興奮 [の痕跡] が滴るのをヴァースデーヴァは目にした。それを見て怒ったハリ神 (クリシュナ) は、その時、彼女ら妻たちを呪った。「妻たちよ、お前たちの心は、私を離れ

<sup>50</sup> Srivastava: etadbuddhvā

<sup>51</sup> 原文 dr̥ṣyaṃ tu puruṣaṃ dr̥ṣṭvā yoniḥ prakliḍyate striyaḥ : この詩句は、MBh XIII, 38, 26 (*idam anyacca devarṣe rahasyaṃ sarvayoṣitām | dr̥ṣṭvaiva puruṣaṃ hr̥ḍyaṃ yoniḥ prakliḍyate striyaḥ*) の cd 句と概ね一致する。あるいは『ガルダ・プラーナ』I, 109, 36 (*brahmacarye 'pi vaktavyaṃ prāptaṃ manmathaceṣṭitam | hr̥ḍyaṃ hi puruṣaṃ dr̥ṣṭvā yoniḥ prakliḍyate striyaḥ*) の cd 句がより語順が一致する。

なお、『ガルダ・プラーナ』ではさらに続けて、『ガルダ・プラーナ』I, 109, 37 (*suveṣaṃ puruṣaṃ dr̥ṣṭvā bhrātaraṃ yadi vā sutam | yoniḥ kliḍyati nārīnām satyaṃ satyaṃ hi śaunaka*) と述べられている。

<sup>52</sup> ここで世間で聞かれることと述べられた詩句は出典不明。あるいは続く第 40 節と続けて読むべきか。第 40 節には『ガルダ・プラーナ』に平行詩節が見出されるが、本詩句には見出されない。

<sup>53</sup> 原文 samāṃsair bhojanaiḥ snigdhaiḥ tathā madhusurāsavaḥ | gandhair manojñair vastraiś ca kāmāḥ strīṣu vijr̥mbhate : この詩句は、『ガルダ・プラーナ』I, 109, 35 (*samāṃsair bhojanaiḥ snigdhair madyair gandhavilepanaiḥ | vastrair manoramair mālyaiḥ kāmāḥ strīṣu vijr̥mbhate*) と概ね一致する。

<sup>54</sup> Srivastava: preṣayitvā

<sup>55</sup> Srivastava: dhṛtāni



別のところへ行っただのであるから、死に際してお前たちは夫によって作られた諸々の世界へは行けないであろう。私が天界へ行くとしても、お前たちは夫の世界から締め出され、寄る辺をなくして、盗賊どもの手中に陥ることになるだろう」と

vasiṣṭha uvāca

śāpadoṣāt tatas tasmāt striyaḥ svargaṃ<sup>56</sup> gate harau |

hr̥tāḥ pañcanadais caurair<sup>57</sup> arjunasya tu paśyataḥ || 47 ||<sup>58</sup>

tatas tās tv alpasattvatvād<sup>59</sup> evaṃ saṃdūṣitāḥ striyaḥ |

prāptavatyo mahac chāpaṃ muktvā tu sa<sup>60</sup> pativratāḥ || 48 ||

rukmiṇīm satyabhāmāṃ ca tathā jāmbavatīm api |

śaptvaivaṃ tāḥ striyaḥ kṛṣṇaḥ sām̐bam apy aśapat tataḥ || 49 ||

vāsudeva uvāca

yasmad atīva kāntaṃ te rūpaṃ dr̥ṣtvā<sup>61</sup> imāḥ striyaḥ |

kṣubdhāḥ sarvās tu tasmāt tvam kuṣṭharogam avāpsyasi || 50 ||

ヴァスィシュタ仙は言った。「それ故、ハリ神が天界へ行った時、妻たちはその呪いの故にパンジャープ地方の賊どもによって、アルジュナの目前から連れ去られたのである<sup>62</sup>。その徳の少なさ故に、それらの妻たちは、このように汚され、重い呪いを得たのであった。クリシュナは、夫に忠実であったルクミニーとサティヤバーマー、それからジャーンバヴァティ<sup>63</sup>を除いてそれらの妻たちをこのように呪ってから、サーンバにもまた呪いをかけた。ヴァースデーヴァは言った。「これらの妻たちは皆、お前の非常に美しい姿を見て心揺さぶられたのだから、お前は重い皮膚病を患うべきである」と

vasiṣṭha uvāca

yasmin śaptaḥ kṣaṇe cāsau pitrā putraḥ svasaṃbhavaḥ<sup>64</sup> |

prāptavān kuṣṭharogitvaṃ virūpatvaṃ ca duḥsaham || 51 ||

sāmbena punar apy evaṃ durvāsāḥ kopito munih |

bhāvyenārthena cātyarthaṃ pūrvānusmaraṇena vai || 52 ||<sup>65</sup>

prāptavān sumahac chāpaṃ sām̐bo vai manujottamaḥ |

<sup>56</sup> Srivastava: svarge

<sup>57</sup> Srivastava: pañcanadais cairair

<sup>58</sup> この第47節から本章の最終節まで、Stietencron と Srivastava の間で偈番号に違いが生じている。この違いの理由は、Stietencron が第46節の次の詩節に対して、彼の参照した刊本上の46という同じ詩節番号が重複するという誤りを、重複した詩節番号を SP 3, 46 というようにイタリック体で示した上で、敢えて踏襲するのに対して、Srivastava は重複している詩節番号を第47節と修正しているからである。このため、Stietencron における SP 3, 47-55 は、Srivastava における SP 3, 48-56 に相当する。

<sup>59</sup> Srivastava: tulyaśāpatvād

<sup>60</sup> Srivastava: tisraḥ

<sup>61</sup> Srivastava: dr̥ṣtvā rūpaṃ

<sup>62</sup> MBh XVI で語られるヤーダヴァ族の滅亡と女子供の略奪のことを指す。n.65 を参照。

<sup>63</sup> ジャーンバヴァティはサーンバの実母である。

<sup>64</sup> Srivastava: svayambhava

<sup>65</sup> Stietencron では SP 3, 52-53 (ただし Stietencron の詩節番号では 51-52) は、Ergänzende Texte として SP 第3章の他の詩節とは別の箇所テキストが置かれている。

tac chāpān musalam jātaṃ kulaṃ yenāsya pātitaṃ || 53 ||

śrutvā durvinayād doṣān evamādin vipāścītā |

nityaṃ bhāvyaṃ vinītena gurudevadvijātiṣu || 54 ||<sup>66</sup>

ヴァスィシュタ仙は言った。「そして、[父親] 自身から生まれたかの息子は父親によって呪われ、同時に重い皮膚病を患い、耐え難いほど醜悪な姿になった。強固に運命づけられた目的の故に、また過去を思い出すことの故に、サーンバは、再びまた同様にしてムニであるドゥルヴァーサス仙を激怒させ、人間の最上なる者であるサーンバは、非常に重い呪いを得た。彼の一族 [ヤーダヴァ族] を没落させた棍棒は、[この] 呪いから生じたのである<sup>67</sup>。修養が欠けているが故のこうした諸々の過ちを聞いて、賢き者は、師たちや神々やバラモンたちに対して、常に修養していなければならない」

tataḥ śāpābhibhūtena sām̐benārādhyā bhāskaram |

punaḥ saṃprāpya tad rūpaṃ svanāmnārko niveśitaḥ || 55 ||

nārado darśayitvā tu strīṇāṃ bhāvaviparyayam |

sāmbaṃ śāpena saṃyojya tatraivāntaradhīyata || 56 ||

「さてその後、呪いに覆われたサーンバは太陽神 (バースカラ) を崇拝し、再びその [本来の] 姿を取り戻すと、自身の名前にちなんで太陽神 (アルカ) を安置させた。一方、ナーラダ仙は、妻たちの心情の転向を明らかにし、サーンバに対して呪いを負わせた後、まさにその場所において姿を消した」(第3章結)

## SP. 6, 1-23

br̥hadbala uvāca

kathaṃ sām̐baḥ prapanno 'rkaṃ kena vā pratipāditaḥ |

ugraṃ śāpaṃ ca saṃprāpya pitaram sa kim uktavān || 1 ||

ブリハッドバラ王は言った。「どうしてサーンバは太陽神 (アルカ) に庇護を求めたの

<sup>66</sup> Stietencron では SP3, 54 (ただし Stietencron の番号では 53) は、テキストから完全に省略されている。本稿では Srivastava に基づいて、当該詩節を補った。

<sup>67</sup> ここで言及されているのは、MBh XVI で語られるヤーダヴァ族の滅亡の話と思われる。そこでは、ヤーダヴァ族の滅亡は、サーンバがナーラダ仙を始めとする聖仙らをからかったことが遠因とされる。

MBhによれば、クルクシェートラでの決戦から36年後のある時、サーンバはクリシュナの都を訪れていた聖仙たちに妊婦のふりをして近づき、お腹の子供の性別を尋ねるという悪戯を行った。妊婦の正体が実際には男であることに気付いた聖仙らは怒って、サーンバらに対して、腹に隠しているのは鉄の棍棒であり、これによってヤーダヴァ族は滅びるであろうと予言する。すると実際にサーンバの股から鉄の棍棒が落ちたため、予言を恐れたヤーダヴァ族はサーンバにその棍棒を砕いて海に捨てさせる。

その後、ヤーダヴァ族の国では不吉な予兆が続いたため、人々は浄めのため海へ向かうことになり、盛大な宴会が催されるが、酔った者たちの中で言い争いが起こり、男たちは海辺の葦 (erakā) を武器にして一族同士で相争う。その葦はただの葦ではなくサーンバが砕いて海に捨てた鉄棒の粉を取り込んで育った葦であり、鉄の棒の如く強力な武器であったため、彼らは互いに殺し合って死んでしまう。

また時を同じくしてクリシュナも獵師の誤射した矢によって命を落とす。その矢じりもサーンバが捨てた鉄棒の破片からできていたという。次いで、ドヴァーラカーでは洪水が起こり、都は海中に没してしまふ。洪水を逃れ生き残った者たちは先だってドヴァーラカーを訪れていたアルジュナに連れられて別の都へ向かうが、その途上で賊に襲われ、アルジュナの目の前で生き残りの女子供たちは略奪される。

かくしてクリシュナを始めとするヤーダヴァ族は滅びたという。

か？ あるいは誰によって [そうするよう] 導かれたのか？ そして、恐ろしき呪いを得てから、彼は父に対して何と言ったのか？」

vasiṣṭha uvāca

tataḥ śāpābhibhūtas tu sāmbaḥ pitaram abravīt |  
 kiṃ mayāpakṛtaṃ deva yena śapto 'smy<sup>68</sup> ahaṃ tvayā || 2 ||  
 ahaṃ tvadājñayā deva tvaramāṇa ihāgataḥ |  
 kasmān<sup>69</sup> nipātitaḥ śāpo mayi te 'napakāriṇi<sup>70</sup> || 3 ||  
 na vai jānāmy ahaṃ<sup>71</sup> kiṃcit prasīda jagataḥ pate |  
 śāpaṃ niyaccha deveśa prasādaṃ kuru me prabho || 4 ||  
 tam uvāca tataḥ kṛṣṇaḥ sāmbaḥ buddhvā hy anāgasam || 5 ||  
 tasmāt tam<sup>72</sup> eva prcchasva prasādya ṛṣisattamaṃ |  
 ākhyāsyati sa te devaṃ<sup>73</sup> śāpaṃ yas te vineṣyati || 6 ||

ヴェアスイシュタ仙は言った。「それから、呪いに覆われたサーンバは父に対して言った。「神よ、貴方によって呪われる理由となるような何か悪しきことを私はしたのでしょ  
 か？ 神よ、私は貴方の命令で急いでここへやって来ました。どうして、貴方に害を働いていない私に呪いが下されたのですか？ 私は全く何も分かりません。お願いです、世界の主よ、どうか呪いを鎮めて下さい。神々の主よ、私に慈悲をお示し下さい」と。それから、クリシュナは、サーンバに罪なきことを認めて彼に言った。「それならば、聖仙たちの最高位の者 [ナーラダ仙] を満足させた後、他ならぬ彼に尋ねよ。お前の呪いを取り除いて下さるであろう神のことを、その者がお前に教えるだろう」と」

athaitat sa pitur vākyam śrutvā jāmbavafisutaḥ |  
 dīnaḥ śokaparītātmā<sup>74</sup> tataḥ saṃcintya vai punaḥ || 7 ||  
 dvāravatyām sthitaṃ viṣṇuṃ kadācid draṣṭuṃ āgatam |  
 vinayād upasaṃgamyā sāmbaḥ papraccha nāradaṃ || 8 ||  
 sāmba uvāca  
 bhagavan<sup>75</sup> brahmaṇaḥ putra sarvajña sarvalokaga<sup>76</sup> |  
 dayāṃ hi kuru viprendra praṇatasya mamānagha || 9 ||  
 tvatto 'haṃ śrotum icchāmi niścayaṃ brūhi tan mama |  
 kaḥ stutyaḥ sarvadevānāṃ namasyaḥ pūjya eva ca<sup>77</sup> || 10 ||

<sup>68</sup> Srivastava: hy

<sup>69</sup> Srivastava: kathaṃ

<sup>70</sup> Srivastava: te 'nupakāriṇi

<sup>71</sup> Srivastava: na te 'pakurmahe

<sup>72</sup> Srivastava: tvam

<sup>73</sup> Srivastava: devaḥ

<sup>74</sup> Srivastava: śāpaparītāngas

<sup>75</sup> Srivastava: bhagavān

<sup>76</sup> Srivastava: sarvajñaḥ sarvalokagaḥ

<sup>77</sup> Srivastava: kaḥ paraḥ puruṣo 'vyayaḥ

dīnasyārīharaḥ kaś ca<sup>78</sup> śaraṇaṃ kaṃ vrajāmy aham |

piṭṛśāpasamutthena kaśmalena mahāmune || 11 ||

abhibhūtasya mokṣo me kaṃ<sup>79</sup> prapannasya vai bhavet |

「さて、父のこのような言葉を聞いて、心を悲哀に満たされた不幸なるジャンバヴァティの息子サーンバは、それから再び熟慮してから、ある時ドヴァーラヴァティの都に住まうヴィシュヌ神（クリシュナ）に会うためにやって来たナーラダ仙に、礼儀正しく近づいてから尋ねた。サーンバは言った。「貴方様！ ブラフマー神の息子よ、全知にして全世界を渡り行くお方よ、バラモンたちの主、穢れなきお方よ！ 拝礼する私のことをお憐れみ下さい。貴方から私はお聞きしたいのです。そのことを正確に私に教えて下さい。あらゆる神々の中で、誰が称賛され、帰敬され、供養されるべき方なのでしょう？ そして、誰が不幸の苦しみを消滅させる方なのでしょう？ 誰に私は庇護を求めべきなのでしょう？ 誰に庇護を求めれば、父の呪いで引き起こされた穢れによって覆われた私に救いはあるのでしょうか？ 偉大なるムニよ！」

vasiṣṭha uvāca

evaṃ sa prcchate tasmai sām̐bāyovāca nāradaḥ || 12 ||

ヴァシシュタ仙は言った。「このように彼は尋ねた。そのサーンバにナーラダ仙は言った」

[以下 SP 6, 13-22 においては、ナーラダ仙がかつて自身が訪れた際に目にした太陽神の世界や太陽神の眷属について語る。ナーラダ仙は太陽神が他の神々からも崇敬されると言い、その偉大さを説く。Stietencron は、その内容を太陽神を巡る伝承として興味深いものとしつつも、サーンバ伝説の本筋とは別の物語であることから、これらの詩節を省略している。本稿でも同様の理由から、これに倣ってテキストと和訳を割愛する]

evaṃ sarvagataṃ nityaṃ pradīptaṃ jagataḥ śubham |

brahmādyaiḥ samstutaṃ devair ādityaṃ śaraṇaṃ vraja || 23 ||

「このように全世界を渡り行き、常に光り輝き、世界に幸をもたらし、ブラフマー神を初めとする神々によって称賛される太陽神（アーディティヤ）に庇護を求めよ！」と [ナーラダ仙は言った] (第 6 章結)

## 2. 解説

### 2. 1. SP について

サーンバ伝説とは SP において語られるクリシュナの息子サーンバの呪いを巡る物語で、そこでは、父によって呪われ重い皮膚病を患ったサーンバが、太陽神に帰依することで呪いから解放され、その後、太陽神のために寺院を建設した次第が語られる。

SP はサンスクリット語で書かれた宗教文献群、プラーナ文献の一つで、より狭義に

<sup>78</sup> Srivastava: kaśā

<sup>79</sup> Srivastava: kiṃ

は、ウパプラーナ文献の一つに数えられる。SPの特徴は、ヒンドゥー教における太陽崇拜の一派、サウラ派 (Saura) に由来する文献であることで、同派の文献の多くが現存しないか、あるいは書名が伝わるのみである中、SPはテキスト全体が現存する唯一のサウラ派文献である<sup>80</sup>。

SP全体の内容は、太陽神の偉大さやその功德に対する称賛、太陽崇拜の称揚、そして神像の作成手順や供養の仕方などの太陽崇拜に関する諸々の儀軌の説明であり、そこでは太陽神やその眷属にまつわる伝説・物語も語られる。サーンバ伝説もSPに含まれるそうした太陽神を巡る物語の一つである。

SPの現行のテキストは全84章で構成される。しかし、これらの章が一举に成立したとは考えられてはならず、Hazra (1958 : 91-94) や Stietencron (1966 : 17-19) によればSPの各章は成立年代を異にする二つのテキストグループに大別されるとされる。

第一のテキストグループに含まれるのは、第1章(ただし後代の加筆と思われる第17-25節を除く)、第2-16章、第18-21章、第24-32章、第34-38章、第46章そして最後の第84章である。また、これに加えて、第17章、第22-23章、第33章、第44-45章も、その内容から判断して第一グループに分類されるが、上に挙げた他の章とは成立年代が異なる章としてさらに区別される。そして、残りの第39-43章、第47-83章は第二のテキストグループを構成する。

さて、第一のテキストグループの成立は、後述の第二のグループの成立に先行するとされ、第一グループこそが現存のSPの最古層であるとされる。第一のテキストグループの成立年代について、Hazra (1958 : 93) は紀元後500-800年と推算している。成立地域については、この第一グループの諸章に含まれる地理情報がインダス河流域を中心とする地域に偏ることから判断して、先行研究の多くは西北インドを有力視している。なかでも、太陽神の本来の座所としてSPが言及するミトラヴァナ (Mitravana) はしばしば今日のムルターン市に比定され、このムルターン市周辺こそがSPの原テキストの成立地であり、ひいてはSPが称える太陽崇拜の中心地であったと推測されている。

また、第一グループに含まれるものの、成立年代を異にするその他の章については、第17章と第22-23章が950年以降、また第33章が700-950年の間、そして第44-45章が950-1050年の間に成立したとされる。これらの章は、扱っている主題から判断して、より後代に成立した章と考えられるが、成立地については他の第一グループの章と同じく西北インドであるとされる。

対して、第二のテキストグループの成立は、第一グループよりさらに後代とされ、第二グループの章はSPのいわば新層をなしている。第一グループ同様、その成立年代および地域について確言することは困難であるが、第二グループの章において称えられている太陽寺院が恐らくはオリッサにある有名なコナーラクのスーリヤ寺院を指すと考えられること、さらにこの寺院の建造年代が13世紀の東ガンガ朝のナラシンハデーヴァ1世の時代(1238-1264年)であることに基づき、早くとも13世紀に、Hazra (1958 : 93) によれば1250-1500年にかけて成立し、第一グループへ加えられたとされる。

このように二つのテキストグループに大別される根拠については、Hazra (1958 : 57-

<sup>80</sup> Hazra (1958 : 29)、Srivastava (2013 : x)

92) が他のプラーナ文献との並行箇所を挙げつつ、両グループ間に見られる相違を細かく分析している。ここでその相違の主要なものに限って取り上げれば、まず両グループには、第一グループに分類される全ての章が、別のプラーナ文献『バヴィシュヤ・プラーナ (*Bhaviṣya-Purāna* : 以下 BhP)』に引用されているのに対して、第二グループに分類される章はこの BhP に全く引用されていないという最大の違いが指摘される。この違いは、SP の各章を二つのグループに分類する際の主な基準となっている。

さらに、内容上の違いとしては、第一グループが西北インドのチャンドラバーガー河畔にサーンバが建てた太陽寺院に関して述べるのに対し、第二グループが称えるのはヴィヴァスヴァットの子マヌによって建てられたとされる太陽寺院 (SP 43, 37) であり、また、これはオリッサにあるコナーラクのスーリヤ寺院と結び付けられているという違いがある。ただし、SP 本文中ではサーンバの太陽寺院もコナーラクの寺院も同一の太陽寺院と見なされている。

また、第一グループが比較的、純粋な太陽神崇拝を説くのに対して、第二グループではタントラの要素が優勢となっておりとされ、また崇拝対象とされる神も太陽神ではなくシヴァ神に代わっていること等が指摘される。

## 2. 2. サーンバ伝説について

SP それ自体はサウラ派に関する貴重な資料として注目に値するものであるが、なかでも研究者の関心を引いてきたのは、サーンバ伝説であり、またその中でもとりわけ SP 26, 26 以下に現れる太陽崇拝者マガ (Maga) に関する記述である<sup>81</sup>。SP はこのマガをマガ・ブラーフマナやシャーカドゥヴィーピーヤ・ブラーフマナ (*Śākadvīpīya-brāhmaṇa*) と呼ぶことから分かるように、バラモンの一種として扱っている。しかし、SP やこれを引用し、さらに独自の記述も加える BhP において述べられるマガの風習には、通常のパラモンの間には見られないのみならず、古代イラン宗教の風習によく類似した風習が存在することから、このマガの起源はインドに移り住んだイラン系の宗教者であったとする見解が先行研究において支持されている<sup>82</sup>。次項に示したあらすじを見ても分かるように、マガにはシャーカドゥヴィーパというインドの外の地から移住したとの伝説があり、このこともマガのインド国外起源説の傍証となっている。

サーンバ伝説は、このマガの存在の故に西欧の研究者の関心を呼び、早くも 19 世紀初頭にはその内容を紹介し、マガと古代ペルシアの宗教者マゴスとの関連性を論じた研究が現れている<sup>83</sup>。ただし、ここでサーンバ伝説の出典となっていたのは SP ではなく BhP であった。その後、20 世紀に入り Hazra (1958) によって SP のサーンバ伝説が BhP の引用元であることが明らかにされると、SP も一次資料としてより一層注目されるこ

<sup>81</sup> SP の他にも、6 世紀の天文学者・占星術師ヴァラーハミヒラの『ブリハット・サンヒター (*Bṛhat-Saṃhitā*)』(59 章 19 節) 等に太陽崇拝者マガへの言及がある。

<sup>82</sup> Hazra (1958 : 29-30)、Stietencron (1966 : 13-14)、Rocher (1968 : 217-218)

<sup>83</sup> Wilford (1812 : 70f.)。この論文の初出は Humbach (1978 : 230) や Stietencron (1966 : 14) によれば 1808 年である。論文が掲載された *Asiatic Researches* の巻号はインドで 1808 年に出版された後、1812 年にイギリスで再出版された。筆者が確認できたのは後者のみで前者は未見であるが、いずれにしても西欧におけるマガへの言及の初出が 19 世紀初頭である。

ととなった。

## 2. 2. 1. サーンバ伝説の刊本について

SP のテキストの最初の出版は 1899 年にボンベイ (Bombay: Veṅkaṭeśvara Press) でなされた。このテキストは Hazra (1958) によって利用されてものでもあるが、文献学的な校訂作業を経たものではなく、また誤りを多く含んでいたことが指摘される。

このため、部分的にはあるが、SP のテキスト校訂を最初に試みたのが Stietencron (1966) である。太陽崇拜者マガについて論じるにあたって、Stietencron はサーンバ伝説に校訂テキストが欠けている事実を指摘し、SP に関して、上述の 1899 年のボンベイで出版されたテキスト (Stietencron (1966) 中の略語は S. I.) と India Office London Library 所蔵の写本 (J. Eglings の Catalogue No. 3619 および 3620 (Stietencron (1966) 中の略号は S. II.)) それから BhP の並行箇所に基づいて校合作業を行い、テキスト校訂とドイツ語への翻訳を行った。この際、彼は自身の判断で SP の特定の章を Die Sāmba Legende (「サーンバ伝説」) としてまとめ、その他に、伝説の本筋ではないものの関連性が高いと判断されたいくつかの章を Ergänzende Texte (「追補テキスト」) として別にしてまとめている。また BhP の SP から引用されたテキストについては、該当する SP のテキストの横に並べて記載し、いくつかの BhP に独自のテキストについては、Die Bhojaka (「ボージャカ (のテキスト)」) としてまとめている。このように、Stietencron の校訂は SP の特にマガに関連する箇所に限られていた。

その後、1983 年にはヴァアラナシの Krishnadas Academy から Krishnadas Sanskrit Series 48 として SP のテキストが新たに出版された。さらに近年、SP 全体の校訂テキストおよび英訳である Srivastava (2013) が出版された<sup>84</sup>。この校訂に際して Srivastava は Stietencron が利用した上のテキストに加えて、Asiatic Society, Bengal Library 所蔵の写本 (Pt. Har Prasad Shastri の Asiatic Society Catalogue Vol. V, No. 4091-4094) を始めとする、いくつかの新しい写本を利用したと述べている<sup>85</sup>。

このようにサーンバ伝説に限れば既に校訂テキストと言い得るものが複数ある。しかし、Stietencron の校訂作業については Humbach (1978 : 251) によって“pseudo-critical”であり厳密な意味での校訂ではないと批判がなされている。また Srivastava の校訂テキストについても、筆者が確認した限りでは、複数の写本を校合したことを表明しているにも関わらず異読一覧が非常に簡素であることに加え、また異読を上げる場合でも、どの写本に基づく読みかを明記していないという問題点がある。従って、サーンバ伝説には二つも「校訂テキスト」と呼べるものが存在するものの、文献学的に厳密な意味での校訂版は未だないといっても良い状況にあると思われる。

<sup>84</sup> Srivastava (2013 : xvii) によれば、この校訂版と英訳に先立ち 1975 年に Srivastava 自身によるヒンディー語訳が出版されているが筆者は未見。現代語訳としてはこの他に、Palladino (2017) において Stietencron (1966) と Srivastava (2013) を比較したテキストと部分的な英訳が存在する。また Palladino 自身によれば彼女は修士論文 (“*I Maga Brāhmaṇa tra eredità iranica e sinecismo indiano*”) でサーンバ伝説のイタリア語訳を行ったというが (Palladino 2017 : 13)、こちらは未公開のため未見。

<sup>85</sup> Srivastava (2013 : xiii-xvi)

## 2. 2. 2. サーンバ伝説のあらすじ

サーンバ伝説の諸章は全て先述の第一のテキストグループに含まれており、従って、全て BhP に引用されている。しかし BhP におけるサーンバ伝説は、大筋において SP と一致するものの、いくつかの点で大きな相違が見出される。以下では、サーンバ伝説全体のあらすじ（本稿で割愛した SP 第 24 章および第 26 章を含む）をまず掲げ、次いで BhP の筋書きとの違いや他の文献と SP の関わりについて述べる。

二大叙事詩に代表される他のインドの文芸作品の例に漏れず、SP も大筋となる語りの中に数々の挿話が語られるという入れ子構造を有している。SP 自らが表明するところから従えば、SP の語り手は吟遊詩人 (Sūta) であり、詩人がナイミシヤの森において賢人シャウナカに歌った内容がこの SP であるという (SP 1, 7)。そして、この吟遊詩人が歌う詩歌の一つが、どの神に帰依すべきかという問いを巡ってなされたブリハッドバラ王とヴァスィシュタ仙の対話である。サーンバ伝説は、この対話の中で語られる。

SP のどこまでが「サーンバ伝説」に該当するかは曖昧であり、その範囲は研究者個人の判断による。例えば Stietencron (1966) は SP の第 3 章、第 6 章、第 24 章、第 26 章をサーンバ伝説の本筋と見なし、*Die Sāmba Legende* としてまとめている。本稿でもこの抜粋範囲に従い、以下にサーンバ伝説のあらすじを紹介する。

SP は吟遊詩人による太陽神への帰敬とその偉大さの称賛から始まり (SP 第 1 章)、次いで、詩人は、ある時、最高の解脱を果たすためにはどの神に帰依すべきかと尋ねたブリハッドバラ王と、太陽神こそが帰依するに最も値する神であると答えるヴァスィシュタ仙の対話について語る。ここで聖仙は、帰依すべき理由と説く中で、太陽神の本来の座所だというミトラヴァナなる地名に言及する (SP 第 2 章)。

王はこのミトラヴァナに関する説明を求め、聖仙はその座所がチャンドラバーガー河の岸辺に位置する都にあること、その都はサーンバという人物によって建設されたものであることを述べる。唐突に現れたサーンバという人物について、何者かとさらに尋ねる王に、聖仙はこのサーンバはクリシュナの息子であり、彼は父親によって呪われたが、それが理由で、自身の名にちなんだ都を建てることになったのだと答える。そこで、呪いの理由を尋ねる王に対して、聖仙は事の次第、即ちサーンバ伝説を物語る。

ある時、クリシュナの都ドヴァーラヴァティーを訪れたナーラダ仙は、自身に対するサーンバの不遜な振る舞いに怒り、これを懲らしめるべくその父クリシュナにサーンバが己の美貌によってクリシュナの妻たちを誘惑していると告げる。初めはその言葉の真偽を疑っていたクリシュナであるが、ナーラダ仙の計らいによって妻たちがサーンバに欲情している様子が明らかにされると大いに怒り、一万六千人いるとされる妻の内、不貞をはたらかなかつたルクミニ、サティヤバーマーそしてジャーンバヴァティーの三名を除く、全ての妻たちを呪うと同時に、彼女たちが受ける将来の責め苦 (MBh XVI が語るヤーダヴァ族の滅亡の際の出来事を指す) を予言する。それから、妻たちの不貞の原因であるサーンバにも、重い皮膚病にかかりその美貌を失うよう呪う (SP 第 3 章)。

しかし、サーンバがクリシュナの妻たちを誘惑しているというナーラダ仙の言葉は真実ではなかった。サーンバが自らの無実を父に訴えると、クリシュナは彼の罪なきことを認める。しかし彼は呪いを解く術を知らなかったため、代わりにその呪いを解くことの出来る神についてナーラダ仙に尋ねるよう促す。呪いを解く術を教えてくれるよう乞



うサーンバに、ナーラダ仙は太陽神こそが帰依するに相応しい神であり、彼に帰依すればその恩恵によって呪いから解放されるであろうと答える。そして、自身が天上世界を訪れた際に目にした姿や他の神々や眷属たちが太陽神を取り囲んでいる様子を語り、太陽神の偉大さをサーンバに説く (SP 第6章)。

このナーラダ仙の答えを聞いてサーンバは、チャンドラバーガー河の岸边にあるとされる太陽神の本来の座所ミトラヴァナへと赴く。そしてそこで苦行し、秘密の賛歌で太陽神を称え、この賛歌を聞いて喜んだ太陽神がサーンバの前に姿を現わし、何でも願いを一つ叶えようと申し出る。そこでまず、サーンバは自らの太陽神への信愛が尽きないようにと願う。この答えに満足した太陽神にさらに二つ目の願いも述べるよう促されたサーンバは、父によって自身にかけられた呪いからの解放をさらに願う。するとたちまち彼は重い皮膚病から回復し、元の美しい容姿を取り戻すことができた。それから太陽神は、サーンバにこのミトラヴァナの地にサーンバの名前でもって寺院を建立するよう命じて、姿を消す (SP 第24章)。

こうして病いから回復したサーンバは、まずチャンドラバーガー河に沐浴しに行き、その河中で黄金製の太陽神像を発見する。この神像はサーンバに語りかけ、神々の工匠ヴィシュヴァカルマン神によって、太陽神の威光から作り出されたという自らの来歴を明かす (ここでは太陽神の像が太陽神それ自身と同一の存在と見なされている)。こうしてサーンバは自身が建てる太陽寺院に安置するのに相応しい太陽神像を手に入れることになるが、その神像に奉仕するのに相応しいバラモンはいなかったため、ナーラダ仙にどのようなバラモンが相応しいのか尋ねる。聖仙は、神像への奉仕による報酬の獲得は、本来神が所有するべき財産を奪う行為であるから正当なバラモンの行いではないと述べ、そのような行為は他のバラモンと共食することを許されない下級のバラモンであるデーヴァラカ (Devalaka) の所業であると答えると同時に、その問いは太陽神に尋ねるべきであるとサーンバを促す。そこでサーンバが同じ質問を太陽神に尋ねると、彼はジャンブードゥヴィーパ (インド亜大陸) にはそれに適当なバラモンは存在しないとした上で、太陽神像に奉仕するのに相応しいバラモンとして乳の海を越えた先のシャーカドゥヴィーパに存在するマガたちの存在をサーンバに教える。太陽神によれば、シャーカドゥヴィーパには太陽神の輝きから生まれ、これを熱心に崇拜するマガと呼ばれるバラモン階級の人々が住んでいるという。これを聞いたサーンバは、クリシュナから神鳥ガルダを借り受けると、その背に乗って乳の海を越えてシャーカドゥヴィーパへ向かい、そこで件のマガたちを見出す。そして彼らを説得して、十八のマガの家族をインドへと連れ帰る。こうして、遂に彼の太陽寺院が完成する (SP 第26章)。

その後、ヴァスィシュタ仙はブリハッドバラ王にこの太陽崇拜者マガについて、彼らがマガやボージャカ (Bhojaka)、ヤージャカ (Yājaka) と呼ばれる理由を説明する (SP 第27章)。その後、二人の対話はサーンバ伝説やマガを離れ、太陽崇拜全般に関するものに移る。

### 2. 2. 3. サーンバ伝説と他の文献との関わり

以上が SP におけるサーンバ伝説のあらすじである。これに対して BhP のサーンバ伝説には、テキスト自体の細かな異同の他に、筋書きにおいて SP とは大きな相違が存在

することが指摘される。

例えば、SP のヴァスィシュタ仙とブリハッドバラ王に代わって、BhP ではスマントゥ仙 (Sumantu) とシャターニーカ王 (Śatānīka) が対話の語り手と聞き手として登場する。また、SP ではナーラダ仙の怒りが原因となってクリシュナがサーンバを呪うが、BhP ではこれとは別にドゥルヴァーサス仙 (Durvāsas) によってサーンバが呪われるエピソードが加わっている<sup>86</sup>。しかしながら、登場人物の違いは些末な違いであり、伝説の内容それ自体を大きく変えるものではない。

BhP と SP のサーンバ伝説の重要な違いは、太陽神像に奉仕するのに適当なバラモンをサーンバが探す過程に見出される。SP 26, 25 においてナーラダ仙は、サーンバに太陽神像を祀るバラモンについて直接太陽神に尋ねるよう促すのであるが、この SP 26, 25 の並行箇所にあたる BhP I, 139, 8 においてナーラダ仙は太陽神に尋ねるよう促した直後に、BhP I, 139, 9 において、あるいはウグラセーナ王の主祭官 (purohita) であるガウラムカ (Gauramukha) に尋ねてはどうかとサーンバを促す。これに続く BhP I, 139, 10-68 で語られるのは、サーンバがこのガウラムカの許へと赴き、彼から太陽崇拝者マガについて教えられるという SP には存在しないエピソードである。ガウラムカはマガが太陽神と女神ニクシュバー (Niksubhā) との間に生まれた子供 (子孫) であると述べ、その出生譚を語る。そして、このマガこそがサーンバの寺院においてその神像に奉仕するに相応しい存在であると告げ、その居場所については太陽神に尋ねるようサーンバを促す。ここで BhP の語りは SP におけるサーンバと太陽神の対話と再び一致することになり (BhPI, 139, 69=SP 26, 26)、BhP においてもサーンバは太陽神からシャーカドゥヴィーパに住するマガについて教えられることになる。つまり、BhP では SP の語りの中に、新たにガウラムカとの対話が挿入されているのである。

この BhPI, 139, 10-68 にかけて展開されるサーンバとガウラムカの対話は、SP の側では SP 26, 25-26 の間にあたる位置に挿入された BhP の加筆部分である。ここでガウラムカが語る内容は BhP に独自の内容である。さらに、ここではマガがボージャカ (Bhojaka) と言い換えられている点が注目される。このボージャカという呼称の使用は、SP でも SP 27, 3 で確認されるが SP 全体としては稀であり、この語はとりわけ BhP が頻繁に用いる太陽崇拝者の呼称である。BhP ではボージャカの語はほとんどマガの異称として用いられており、ガウラムカとの対話が語られる BhPI, 139 以降でも、BhPI, 140-147 においてボージャカと呼ばれるこの太陽崇拝者の宗教的慣習が言及され、また BhP I, 117 ではサーンバ伝説とは別に、ボージャカの起源譚や宗教的義務および禁忌が語られる。

この「マガ」と「ボージャカ」について、BhP 上での両者の同一視を批判的に検討し、本来は起源を異にする別の宗教集団であったとする主張が Hazra (1958 : 97-99) および彼以降の研究者たちによってなされている。この主張自体は概ね支持されてはいるものの、ボージャカの素性を巡っては研究者の間で意見の相違が著しく、マガと同様に古代イラン宗教と一致する要素が指摘されることから、ボージャカはマガとは異なるイラン宗教者であったとする説 (Stietencron 1966 : 277-282) がある他、インド土着の宗教者とする説 (Humbach 1978 : 247)、あるいは両者はインドに移住した時期が違うだけの同じ

<sup>86</sup> BhPI, 72, 14-38: SP との対応について言えば、SP 3, 8 以下に加えられた形になる。

イラン系宗教者であるとする説 (Srivastava 1988 : 119) がある。これらのマガおよびボージャカの起源を巡る議論については、別稿に譲る<sup>87</sup>。

サーンバ伝説を引用する他のプラーナ文献は BhP だけではなく、複数のプラーナ文献にも引用されている<sup>88</sup>。しかし、これらの文献は直接 SP から、あるいは BhP を介してサーンバ伝説を引用しているのみで、BhP が行ったような大幅な加筆は行っていない。

また、サーンバ伝説には『マハーバーラタ (Mahābhārata : 以下 MBh)』との並行箇所が数か所ある。なかでも注目されるのは、本稿の訳出範囲外ではあるが、SP 26, 30-31 である。この詩節は MBh VI, 12, 33-35 に概ね一致する。SP および MBh のこの詩節は、シャーカードゥヴィーパの四階級について述べるもので、その四階級の名前としてマガ (Maga)、マシャカ (Maśaka) (SP では Maśaka ではなく Māmaga となっている)、マーナサ (Mānasa)、マンダガ (Mandaga) という名前が現れ、それぞれ順番にバラモン、クシャトリア、ヴァイシャ、シュードラ階級に相当するとされる。MBh のこの記述は SP 以外のプラーナ文献にも引用されており<sup>89</sup>、さらにアル・ビールニーの『インド誌』の第 24 章においても、『ヴィシュヌ・プラーナ』が典拠であると断った上で、ゴメダドゥヴィーパ (Gomedadvīpa) には、マガ (Maga) (あるいはムリガ Mriga)、マーガダ (Māgada)、マーナサ (Mānasa)、マンダガ (Mandaga) という名前のインドの四種姓に相当する四階級が存在するとの記述が見出される。

一般に MBh の成立年代は SP の最古層の成立に先立つ年代が与えられるため、当該箇所については SP が MBh を引用したものと考えられる。SP が MBh のこの記述を引用した理由として、Bronkhorst (2016 : 130-131) では、SP とは異なり、MBh の記述は神話的な存在に言及したものであったとする解釈を前提にして、SP の MBh の引用はその記述によってインド社会におけるマガの正当性の確保を試みたものであると論じられている。この議論の前提の是非はともあれ、この SP と MBh の並行箇所の存在は、サーンバ伝説の成り立ちやマガのインド社会への進出過程を考察する上で重要な手がかりとなり得る。

また、サーンバ伝説と他の文献の類似に関連して、7 世紀の詩人マユーラ (Mayūra) を巡る伝承との一致を指摘できる。伝承によればマユーラは自身の娘 (または妹) の肢体を『マユーラ・アシュタカ (Mayūra-Aṣṭaka)』において歌ったが、あまりに官能的な描写を行ったために彼女の怒りを被り、呪いをかけられ重い皮膚病を患ったという。病いに苦しむマユーラが太陽神に帰依し、彼の二つ目の詩『スーリヤ・シャタカ (Sūrya-Śataka)』によって太陽神を称えたところ、彼は呪いから解放され、快復したという<sup>90</sup>。

呪いによる重い皮膚病、太陽神への帰依と詩歌による太陽神の称賛、そしてその結果としての病からの回復という展開は、サーンバ伝説の前段をなすサーンバの呪いと太陽神への帰依、そしてそれによる病いからの回復という筋書き (SP 第 3 章、第 6 章および第 24 章) と一致しており、この二つの伝承の間には、何か影響関係ないし両者の出

<sup>87</sup> 先行研究におけるマガおよびボージャカの起源論については永井 (2019 : 41-44) も参照。

<sup>88</sup> Hazra (1958 : 83-88) では『ブラフマ・プラーナ』や『スカンダ・プラーナ』における SP および BhP の並行箇所が列挙されている。

<sup>89</sup> 『ヴィシュヌ・プラーナ』II, 4, 69, 『クールマ・プラーナ』I, 47, 36, 『アグニ・プラーナ』119, 21

<sup>90</sup> 辻 (1973 : 135-136)

典となった別の共通の伝承の存在が予期される。とりわけ注目されるのは、このマユラの活動年代である7世紀がサーンバ伝説を含むSPの最古層の成立時期と近いという事実である。また『スーリヤ・シャタカ』の内容が太陽神の称賛である事実は、太陽崇拝の称揚を特徴とする『サーンバ・プラーナ』との関連性が窺われる。

また、太陽崇拝と重い皮膚病（癩病）の結びつきに関しては、ヘロドトス『歴史』第1巻138における、ペルシア人は癩病や白癩を太陽神に罪を犯したために罹るものとするという記述との関連性も指摘される。ここで述べられているのは重い皮膚病（癩病）の原因についてであって、太陽神がこれを癒す話ではないものの、ペルシア人が太陽神と重い皮膚病の間に特別なつながりを見ていたことが読み取れる。それ故、サーンバ伝説の中心をなす太陽神と重い皮膚病というモチーフそれ自体が、太陽崇拝者マガとともに、古代ペルシア・イランの伝統からもたらされたものである可能性がある。

### 【参考文献】

- Bronkhorst, Johannes. 2016. *How the Brahmins won: from Alexander to the Guptas*. Leiden: Boston Brill.
- Hazra, R. C. 1958. *Studies in the Upapurānas*. Vol. I: *Saura and Vaiṣṇava Upapurānas*. Calcutta Sanskrit College Research Series, No. 11. Calcutta: Sanskrit College.
- Humbach, Helmut. 1978. “Miθra in India and the Hinduized Magi.” In *Études Mithriaques: actes du 2e congrès international Téhéran, du 1er au 8 septembre 1975*, pp.229-253. Téhéran: Bibliothèque Pahlavi; Leiden: Diffusion, E. J. Brill.
- Palladino, Martina. 2017. “*The Sun-Worshipping Śākadvīpīya Brāhmaṇas: An Analysis of Their History and Customs from Ancient Times to the Present.*” Doctoral dissertation, University of Bologna.
- Rocher, Ludo. 1986. *The Purānas*. A history of Indian literature, Vol. II, fasc. 3. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Srivastava, V. C. 1988. “Two distinct groups of Indian sun-priests: an appraisal.” In *Purāna*, Vol.30 (2), pp.109-120. Varanasi: All India Kāśīrāja Trust.
- Srivastava, V. C., ed. and trans. 2013. *Sāmba-Purāna: An Exhaustive Introduction, Sanskrit Text, English Translation, Notes & Index of Verses*. Delhi: Parimal Publications.
- Stietencron, von Heinrich. 1966. *Indische Sonnenpriester: Sāmba und die Śākadvīpīya-Brāhmaṇa: Eine textkritische und religionsgeschichtliche Studie zum indischen Sonnenkult*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Wilford, Francis. 1812. “An Essay on the Sacred Isles in the West, with other Essays connected with that Work.” In *Asiatic Researches*, Vol. XI, pp.11-152. London: Asiatic Society of Bengal.
- 上村勝彦訳 1984 『実利論（上）』岩波文庫、岩波書店。
- 辻直四郎 1973 『サンスクリット文学史』岩波全書 277、岩波書店。
- 永井悠斗 2019 「インド文献に現れる宗教者「マガ」—先行研究と関連文献の整理—」『宗教学・比較思想学論集』20: pp.39-58、筑波大学宗教学・比較思想学研究会。

(ながい・ゆうと 筑波大学人文社会科学研究所 哲学・思想専攻)